



乳幼児期の支援

第2回 ドクターズセミナー
 社会福祉法人 青い鳥
 川崎西部地域療育センター
 柴田 光規 2019年11月23日

1

ライフサイクルモデル

E.エリクソン (佐々木正美先生解釈)

乳児期 0-2歳 「基本的信頼」の獲得。
 人を、自分を、信じられるか。「母に愛されてところが生まれる」

幼児期 2-4歳 「自律性」を身につけること。
 セルフコントロール。「愛されながら自信をはぐくむ」

児童期 4-7歳 「自主性」、積極性、主体性、目的性をはぐくむ。

学童期 7-12歳 「勤勉性」の基礎づくり。
 友達とのさまざまな共有経験

思春期・青年期 13-22歳 「アイデンティティ」の形成。
 「仲間を鏡にして自分を見出す」

2019/11/23

川崎西部地域療育センター 柴田光規



2

螺旋形モデル

中田洋二郎 先生 一部改

- 子どもの障害を受容していると思われる家族でも、本人が成長するたびに、社会の無理解という壁にぶつかることがある。
- 障害がある子どもの親の心の中には、障害があることを認める気持ちと、障害があることを認めたくない気持ち（障害がいつかは治るのではないか）が同居している。
- この2つが見えたり消えることを繰り返して、適応はらせん状に進んでいく。

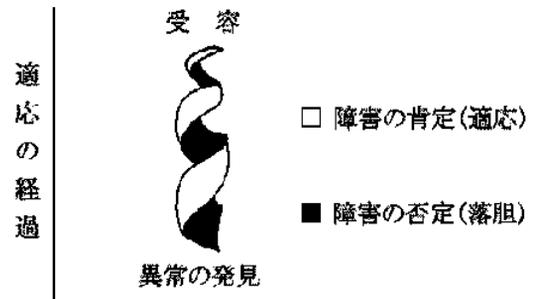


図6 障害の受容の過程

2019/11/23

川崎西部地域療育センター 柴田光規

3

3

発達障害とトラウマ トラウマインフォームド・ケア

- 発達障害を持つ子どもは感覚や認知特性のために出来事の体験も独特。
- 失敗や叱責を伴うトラウマ体験を持ちやすい。
- トラウマが子どもの人生にどういった影響を及ぼしているのかを意識して対応する視点を持つことでより適切な支援になる。

基本コンセプトは、子どもに関わる大人が、

- ① トラウマの広範囲な影響と回復の過程について十分な知識を持つ
- ② トラウマ症状やそのサインに気づき、二次的な暴露を防ぐ
- ③ 有効性が実証された適切な方法で対応する

4

診断

- 診断は支援の一つ。
子どもの行動の背景を知る、必要なリソースの利用に役立てたい。
- 「診断を知ることが、子どもそのものや
子どもの心から目をそらすことになるとすれば、
われわれは診断をすてなければならない」 (青木省三 先生)

診断別の有無とは関係なく、できることはいっぱいある。
医療だけではくらしは変わらない。
家族を含むチームで、子どもの行動をよく観察し、
くらしやすくなるように支援したい。

2019/11/23

川崎西部地域療育センター 柴田光規

5

5

非障害自閉スペクトラム

(Autistic Spectrum Without Disorder; ASWD 本田秀夫 先生 一部改)

- 医学概念としての「自閉スペクトラム障害」よりも広い概念。
- 「臨機応変な対人関係が苦手、自分の関心、やり方、ペースの維持を最優先させたい志向が強く、人との関わりが動機になりにくい」という心理的・行動的特性を持つ。
- 幼少児期は特性が軽症で医療的支援を受けなかったASDの人たちが思春期以降に深刻な二次障害を呈することがある。
- 早期介入を行うことで二次障害を予防することが可能。
予防できた人たちは必ずしも障害者とみなされず通常の社会生活を送ることが可能。

幼少児期には特性が軽度であっても、診断にこだわらず、
早期から何らかの配慮・支援を行うことが望ましい。

6

具体的な「行動」に焦点をあてる

特性 → 変わりにくい

行動 → 変わりやすい

「具体的な行動」に焦点をあてて

アプローチするとくらしやすくなる。

例) 落ち着きがない → 算数の授業中に廊下に出てしまう

2019/11/23

川崎西部地域療育センター 柴田光規

7

7

行動に焦点をあて、肯定的に注目する

- ① 行動を「見える・聞こえる・数えられる」形でとらえる
 友達にやさしい ⇒ 「友達のおもちゃを貸す」
 「転んだ友達に大丈夫?と言う」
 「5分でゲームをやめて譲れる」
- ② 好ましい行動をほめる、注目する
 「着替え始めて偉いね」「宿題やっているね」
- ③ 好ましくない行動が切り替わったら、即座にほめる。子どもは適切な行動を再認識し、以後、行動を切り替えやすくなる。
- ④ 効果的な指示「穏やかに」「近づき」「静かに」「指示する」
 「予告：10数えたら片付けよう」「選択：レゴとプラレールどっち」
 「ごほうび：片付けできたら、抱っこ」

2019/11/23

川崎西部地域療育センター 柴田光規

8

8